

養泉寺の建物について

原戸 喜代里・千木良 礼子

はじめに

養泉寺は京都市東山区本町5丁目185に建つ。この度未指定の本堂と書院を調査する機会を得たので、ここに報告する。

沿革及び本堂について

『京都市の地名』によれば養泉寺は真宗大谷派で本尊を阿弥陀如来とする。『京都府地誌』に天文11年(1542)創建、僧浄通開基とするが、「坊目誌」によれば創建地は不明で移ってきた、とある。

また、寺には『養泉寺略記』という門徒向けの出版物がある(親鸞聖人七百回忌記念とあるため昭和35年(1960)頃に刊行とされる)。この略記によれば放光山今小路殿養泉寺は、平家一門ゆかりの寺で、建物の経歴に関する記載については、12代霊空の代で唐破風玄関を再建、天保3年(1833)に庫裏を再建した。嘉永2年(1849)に今小路殿・車寄玄関が再造される(昭和25年記録板を発見)。昭和25年(1950)に今小路殿・車寄玄関屋根を銅葺に変更したとある。

本堂は西面して建つ。建物は背面の内陣部分を切妻平入とし、手前の外陣部分を寄棟造妻入とした2棟の構成である。いずれも本瓦葺を基本とし、一部改修によって棧

瓦葺となっている。

規模について、内陣は正面桁行が七間、梁行が三間である。外陣は正面梁行が五間、桁行を三間とする。

外観について、内陣の南側面は白漆喰壁とし、上部をトタンでかぶせる。もとは土壁と想像される。東背面と北側面には半間の下屋がつき、廊下と物入を配置する。外陣は、柱間装置として西正面に棧唐戸を3枚設置し上部に菱格子の欄間をはめる。両脇は半部とする。北側側面は坪庭に面し、廊下が張り巡らされる。建具は西端を板開戸、中央と東端を明かり障子とする。南側面は西端を板開き戸、中央と東端を半部とする。半部の内部には引き違いの明かり障子を入れる。西を正面とし、南側側面は閉鎖的、北側側面は坪庭に面することから、北側は庭とのつながりを意識していると思われる。

正面向拝について、向拝柱には虹梁及び木鼻が付く。木鼻は渦巻絵様である。向拝柱及び木鼻には皿斗と連三斗を乗せる。虹梁の中央には出組、左右に墓股を置く。

室内について、外陣は畳敷とする。建具上部は白漆喰を塗る。天井は出組で支えられ、正面(西面)はその間に墓股を入れる。出組の木口には白漆喰を塗る。

内外陣境は、中央三間は明かり障子の棧唐戸とし、上部に雲の彫刻と金の彩色が施

された欄間を設ける。欄間上部は虹梁で飾る。左右は引き違いの襖を入れる。襖には松や花、金雲が描かれ、彫金が施された引手金具が付く。内外陣境の側柱と鴨居の納まりには改変と思われる痕跡がある。

内陣は、白漆喰の垂れ壁によって3室に分けられる。床はいずれも床板である。

内陣中央の室は、中央に須弥壇を置く。須弥壇は年代の記銘がないが、須弥壇下の内部を確認すると丸釘が使用されていることから、近代のものと思われる。天井は黒漆に赤漆で縁取りした格天井とする。格天井板は後補材の布を貼る。左右背面には位牌棚を置く。位牌棚上部は龍を彫刻した欄間をつける。位牌棚の壁面は金箔をはり、蓮が描かれる。

内陣の左右の室は、天井を棹縁天井とする。背面には位牌棚が設けられている。位牌棚上部は天女や鳳凰を彫刻した欄間をつける。位牌棚の壁面は金箔を貼る。

内陣の位牌棚はいずれも、棚を黒漆塗とし、飾金具を付ける。腰板の額縁にはさらに飾金具も付く。板は型押しした金属板（年代不明）をつけている。

また、銘入りの獅子口が2基、保管されていた。刻銘は「寛政二年（1790） 戌霜月 近江屋権兵衛志 細工人 同安之助」、あわせて丸に「大」の刻印が押される。絵様からみてもこの時期の年代の建物と思われる。

内陣と外陣の境の痕跡や、屋根の様子からは、当初は内陣のみで後世に外陣が付属されたようにも見受けられるが、確証が得られない。建物全体としては、改変の様子も見受けられるが、本瓦が用いられている

ことや彫刻や彫金などの細部意匠が多様に使用されている点からは、丁寧につくられた様相がわかる。

（千木良）

書院について

書院の建築年代は明らかではないが、養泉寺には弘化2年（1845）の普請願が残されている。この普請願は、塀の改修や一間四方の男部屋の建築の他、本堂北の座敷に繋がる廊下の西に3畳敷の建物を建てたいというものである。付属する計画図には、本堂の北に位置する東西に長い建物が記載されている。本堂の東端と西端に2カ所廊下が設置され、そのうちの東端の廊下の西に、新築を計画している3畳の建物が朱書きされている。東端の廊下は現存しないが、本堂、廊下、書院の位置関係は現状と大きく変わらないと思われる。

明治19年（1886）の『寺院明細帳』には養泉寺の由緒や境内の建物、配置図が記載されている。養泉寺の書院は、桁行八間、梁行三間とあり、現在の書院の建物より桁行が一間半長い。『寺院明細帳』の配置図では、弘化2年の図面には書院の西にあった土蔵がなくなり、居間や玄関が建てられている。前述の記録板に記される嘉永2年（1849）の今小路殿・車寄玄関の再造により、整備されたと推測される。書院と居間、玄関の配置は現在のものと同様とみられ、この頃には寺観が整えられていたと考えられる。

現在の書院は、本堂の西端から北へ延びる吹き放しの廊下で接続される。切妻造平

入で、桁行六間半、梁行三間の東西に長い建物である。軒は一軒で、角垂木の化粧屋根裏となっている。桁は舟肘木で支持される。六葉の釘隠を打った内法長押を廻し、舞良戸を建てる。舞良戸には鶴と松とみられる吉祥文様の飾金具が打たれている。

書院の平面は、東から西へ8畳の上段の間、10畳、8畳の3室が接続する。南側には幅一間の入側が設けられ、さらにその外側を落縁とする。北側にも縁が設けられ庭を眺めることができる。

書院東端に位置する上段の間は、東面に間口1間半よりやや狭い床の間と床脇に違棚と地袋を設け、南面は帳台構とする書院造である。西面には4枚引の襖、北面は付書院とすりガラスが嵌められた引違のガラス戸となっている。ガラス戸は、大正期から昭和初期に流行した意匠であることから、この頃に、おそらく他の2室同様、障子だったものがガラス戸に入れ替えられたと推測される。

床の間の壁は漆喰塗で、1枚板の床板、床柱、落掛は黒塗とする。長押も漆塗とし枕捌きで納められる。長押には六葉の釘隠が打たれ、小壁は漆喰で塗られている。東面の床廻りの部材は、加工の状況から南面、西面の部材より新しいものと思われる。

床脇の棚や地袋も漆塗で見付には植物文様の飾金具が付く。地袋の扉は脱落しているものの、室内に残されている地袋のものとみられる板戸には吉祥文様の鳳凰と桐が描かれており、扉に描かれた絵は、江戸末から明治のものともみられる。

天井は白紙が貼られているが、四方には

四分一が取り付いている。白紙の下には下張りが見えるため、元は天井に絵が描かれていたとみられる。上段の間の天井は、格式の高い格天井と考えるのが通例であるので珍しい構成である。

帳台構の襖は近年張り替えられたもので、紋縁付の唐紙が張られる。西の10畳間との境の4枚引の襖は菊の文様で引手も植物の文様とする。

明治19年の書院の南側には梁行一間半桁行二間半の茶室が接続しているが、現在は梁行一間となっており、半間小さくなっている。東面の床廻りの部材が比較的新しいことや地袋の絵の年代から推測して、明治19年以降のどこかの段階で、書院や茶室の東面が改修されたのかもしれない。

上段西の10畳と8畳の間は、竿縁天井で小壁は漆喰塗とし長押が廻される。長押には釘隠が打たれる。北面と南面は腰障子とする。2室の境には竹の節欄間を入れる。2本溝の敷居があることから、元は4枚引の建具が入ったとみられる。欄間上部の空間が連続しており、広い空間を感じさせる。

入側は、竿縁天井が張られ、縁境の舞良戸の室内側は障子を建てる。入側の欄間は、植物の文様が彫られている。上段と10畳間の境の通りには、座敷と同様の菊の文様の襖が入る。

書院は厳格な書院造を基本とし、とりわけ、上段は付書院、床の間、違棚、帳台構が揃う格の高い書院造とするものの、天井は格天井ではなく天井画が描かれていたと思われる。また、上段に続く10畳、8畳の間の庭に面する建具は障子のみとし、室境

には竹の節欄間を入れて2室の天井を連続させることにより、軽やかで広い空間を創出した。養泉寺書院は、格式を持ちつつも

軽やかさを併せ持つ興味深い接客空間と考えられる。

(原戸)

はらと きより
原戸喜代里 (文化財保護課 主任 (建造物担当))
ちぎら れいこ
千木良礼子 (文化財保護課 主任 (建造物担当))



図1 門



図2 本堂全面 (西面)



図3 本堂南面



図4 向拝柱上部



図5 向拝虹梁上の曇股と組物



図6 内陣（中央）



図7 脇陣

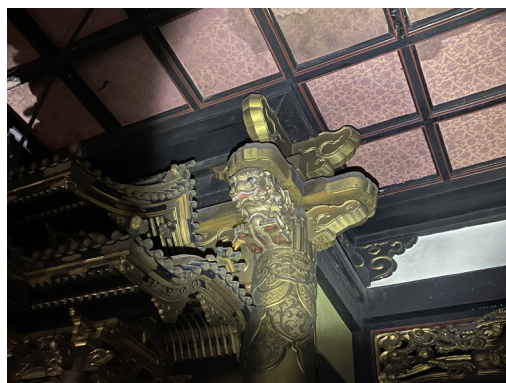


図8 須弥壇上部（隅部）

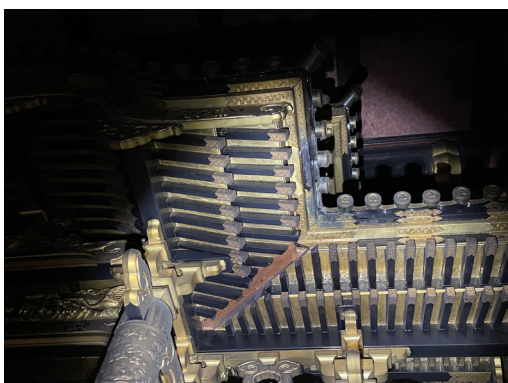


図9 須弥壇上部



図10 獅子口

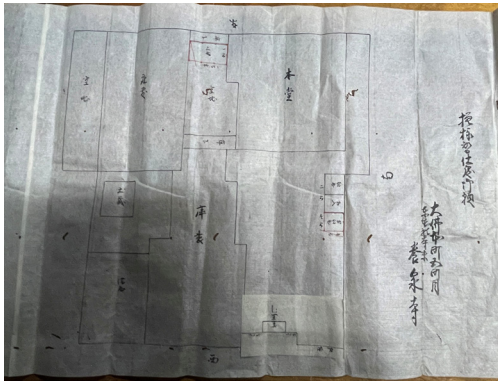


図11 弘化2年 普請願の配置図

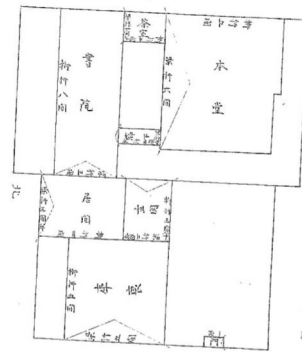


図12 明治19年 寺院明細帳より



図13 書院 外観南面



図14 舞良戸の飾金具



図15 上段 室内東面



図16 上段 室内北面



図17 六葉の釘隠



図18 違棚



図19 違棚の飾金物



図20 地袋引違戸 (左：桐 右：鳳凰)



図21 天井 下張りが確認できる



図22 帳台構



図23 10畳間と8畳間 東より西を見る



図24 10畳間より上段を見る

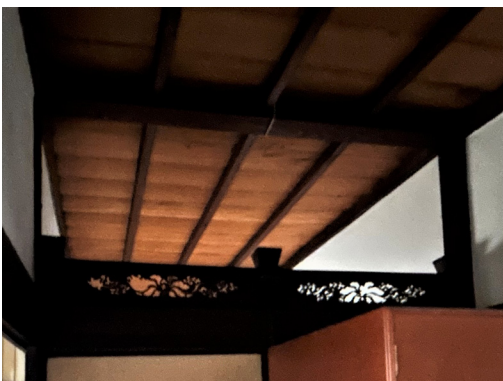


図25 入側の天井と竹の節欄間